

こちら特報部

被害者団体「風車問題伊豆ネットワーク」の覚張さん(左)は「海外で報告されている低周波による健康被害の特徴と一致するが、医者につづ病と言われる人も。体内でどのような仕組みにより異変が起きるのか、分からない」と困惑する。住民代表の七人は七月、原因を風車と特定するため、国の公害等調整委員会に裁定を求めて申請し、受理された。今後、委員会が関係者への審問や現地調査をする。風力発電をめぐる原因裁定は初めてだが、職員は「低周波被害は騒音に比べて確たる判断材料がなく、症状に個人差もある。容易ではない」と語る。

伊豆半島は「風車銀座」になりつつある。静岡県は二〇二〇年度から新エネルギー等導入戦略プランを進めてきた。発電に適した風が吹く伊豆半島には、六月現在で二十四基の風車がある。計画分を含めると、一年度には百九十九基、発電容量は目標を上回る二十万五千瓩に達する予定だ。その「銀座」の一角、南伊豆町でも建設中の風車がそびえる。電源開発(電発、東京)などが出資した石廊崎風力発電事

界13位の185万瓩。財団法人・日本自然保護協会(東京)のまとめでは全国約30カ所で反対活動が起きている。環境省は八月、住民から同様の訴えがある愛媛県伊方町で低周波調査を始めた。

業。来年三月までに計三万四千瓩を発電する。この風車から約四百四十瓩の距離に暮らす木合開発機構(NEDO)の工業の村尾真司さん(五二)のマンションがある。また、電発側は「地元建設資材を運ぶ大型ヘリコプターなど環境影響評価(アセスメント)がすべて終了後、補助金を申請し、問題はない」としているが、近家から飛行計画が知られる。だが、補助金の隣住民に対し、各戸別に交付が決まったのはアセスの結果に専門家が見ても村尾さんたちの憤りのなか(村尾さん)開される前だった。村尾さんの怒りには建設前の行政手続きへの疑念の公募要領では、評価については、環境省の文書にも明記されている。発電建設事業費の約三割結果を添付して申請すれ

因果関係は不明、調査を申請

毎日、カレンダーに書き込んだ。「耳が痛い」「気持ち悪い」。町役場の駐車場に車を止め、寝たこともあった。体調の異変を訴える住民に、医師は「今住んでいる所から離れない」と言った。しかし、診断書に風車が原因だとは書かない。因果関係が解明されていないからだ。住宅地はもとより別荘地、退職後に首都圏から移住した人が多い。約三百世帯のうち、五十世帯の約百人が定住。うち八割が健康被害を訴えている。「風車そのものに反対ではない。でも、人家の近くに造らないでほしい。健康のために移ってきたのに病人にさせられた」(住民の女性)風車は現在、止まっている。昨年四月に落雷や強風で二基のブレードが折れた。今年五月に再び折れた。今年五月に再びブレードが壊れ、原子力安全・保安院が原因解明まで停止を指導した。住民たちは「破片が飛んでを処分された。手が震え、目が見えなくなった」と不安。一方、「再稼働したら、また」と健康被害に神経をとがらせる。

風力発電で健康被害？

人に優しいはずの風力発電に住民が悲痛な声を上げている。静岡県・伊豆半島。巨大な風力発電用の風車群が立ち並ぶやいなや、近隣住民から健康被害を訴える声が相次いだ。住民らは風車が出す低周波が原因とにらんでいるが、発生や体への影響についてのメカニズムには未解明な部分が多い。とはいえ、人々の苦悩は日々募っている。とり急ぎ、現場を訪ねてみた。

(大野孝志)

E.F.北海道根室市)が立てた。しかし、同支建設した「伊豆熱川ウィンドファーム」だ。秒速十二メートルの風を受け、ええ」と却下した。すると、一基で千五百瓩を、試験運転が始まると、発生するという。高さ約百メートルのブレード(羽根)のモーター音、ブレードが直徑約八十センチの円を描いて高速で回る。巨大風車が現れたのは、伊豆熱川から車で十五分。眼前に白い巨大な風車十基現れた。風力発電事業者「グリーンエナジーファクトリー」(C)を静岡県下田支部に申



住宅街のそばに立つ伊豆熱川ウィンドファームの風力発電機群。静岡県東伊豆町で、本社へ「わかづき」から

低周波影響か 不眠、いらいら、頭痛…

低周波 周波数がおおむね100Hz以下の波動で、人に聞こえない20Hz以下も含まれる。環境省の「低周波音防止対策事例集」などによると、風車のほか、新幹線のトンネル、高架橋の接目、ボイラーなどから発生。不眠、いらいら、頭痛、耳鳴り、吐き気などの被害をもたらす可能性があるが、「因果関係がはっきりしない場合も少なくない」としている。

風車から三百五十メートルの所に住む七十代の女性は「目、鼻、肩が背中まで張った。鼻血が口からたまはるほど出た。目まいで歩けない。すぐにいらいら、夫とよく話し合い、健康のために移ってきたのに病人にさせられた」(住民の女性)別七十代の女性宅では、十基すべてが動き始めた。昨年四月に落雷や強風で二基のブレードが折れた。今年五月に再びブレードが壊れ、原子力安全・保安院が原因解明まで停止を指導した。住民たちは「破片が飛んでを処分された。手が震え、目が見えなくなった」と不安。一方、「再稼働したら、また」と健康被害に神経をとがらせる。

毎日、カレンダーに書き込んだ。「耳が痛い」「気持ち悪い」。町役場の駐車場に車を止め、寝たこともあった。体調の異変を訴える住民に、医師は「今住んでいる所から離れない」と言った。しかし、診断書に風車が原因だとは書かない。因果関係が解明されていないからだ。住宅地はもとより別荘地、退職後に首都圏から移住した人が多い。約三百世帯のうち、五十世帯の約百人が定住。うち八割が健康被害を訴えている。「風車そのものに反対ではない。でも、人家の近くに造らないでほしい。健康のために移ってきたのに病人にさせられた」(住民の女性)風車は現在、止まっている。昨年四月に落雷や強風で二基のブレードが折れた。今年五月に再びブレードが壊れ、原子力安全・保安院が原因解明まで停止を指導した。住民たちは「破片が飛んでを処分された。手が震え、目が見えなくなった」と不安。一方、「再稼働したら、また」と健康被害に神経をとがらせる。

住民訴え風前のチリ



風車の近くに住む女性が健康被害を書き込んだカレンダー。静岡県東伊豆町で